

【受賞解説】

“天気マーク”では伝えられない情報がある 気象報道の課題と北海道への期待

—日本気象学会北海道支部 2025年度「北海道支部賞」受賞に際して—

北海道文化放送 報道情報部
気象予報士・防災士
菅井 貴子

1. はじめに

受賞にあたりご推薦をいただきました北大の稻津将先生、ご承認をいただきました委員の方々、気象研究に携わる方々に、感謝を申し上げます。私はこれまで皆勤賞も含めて賞を頂いたことがありませんでしたので、人生初めての賞で、嬉しく感じています。本当にありがとうございます。

私の現在の主な仕事は、気象キャスターとして、平日夕方のテレビの生放送やインターネットやSNSなどのメディア配信で、北海道の予報を一般の方に伝えることです。業務を通しては、厳しさを感じこともあります。視聴者にとっては、当たって当たり前で、外れるとお叱りの声が届くことも少なくありません。といっても、私は予報が「外れた」という認識はなく、「ずれた」と思うのですが・・・。特に、学校の運動会、ゴールデンウィーク、年末年始の予報がずれると大変です。

私は、基本的に謝ることはしないと決めています。天気予報は、時空を超えた科学技術の集積です。それぞれの時代の学者が命懸けで研究を積み上げ、スペコンの精度も目覚ましく、世界中が技術を連携し、宇宙からの観測データも反映されています。今も最前線で研究に尽力する方々への敬意からも、私が謝ったら失礼だと思うのです。私は伝え手として25年になりますが、経験を通して課題も感じていますので、2つ事例をお話させて下さい。

2. 予報ができても伝わらない

2013年3月2日、低気圧が北海道付近で急激に発達し、オホーツク海で気圧が968ヘクトパスカルまで低下。さらに上空には強い寒気・・・。記録的な暴風や暴風雪が予想され、無事であるはずがありません。前日に、気象台に電話をかけて、詳細な見通しを伺ったところ、

「朝からずっと吹雪が続いたほうがむしろマシだ、今回は小康状態が怖い。もし外出をしてしまうと、ホワイトアウトで帰宅困難になり、死者が出るかもしれない。」
そこまでの予測もされていました。

前日の天気コーナーでは、

「あすの嵐は“魔の間”がある、日中に雪や風が収まても、絶対に出かけないで」繰り返し訴えましたが、夕方のローカル放送の視聴率は、当時で5～15%くらいです。たとえ、テレビがついていても、何となくの視聴なので、気象キャスターの呼びかけが届いているとは限りません。

翌日は、皮肉なほど予報はよく当たり、朝の吹雪は昼前にいったん収まり、晴れ間さえ出ました。昼すぎになると急変し、吹き溜まりによる立ち往生が発生し、中標津町では、雪に埋まった車内で、母子4人が一酸化炭素中毒で命を落としました。湧別町では、小学校3年生の娘さんを抱きかかえた状態で、男性が凍死をするという痛ましい事故がありましたが、その背景は、娘さんを車で迎えに行った帰り道に、暴風雪で見通しが全く効かなくなり、数十メートル先に、知人の家があり避難をさせてもらおうと車を降りたようですが、歩くことができず、娘さんを守る態勢で夜を過ごしたのです。娘さんは無事でした。結果として、道内で9人が死亡する惨事になりました。

後日、被害にあわれたご家族を取材したところ、

「吹雪を示す雪だるまマークが揺れていたので、荒れることはわかっていた。確かに、朝はふぶいていたが、次第に晴れてきたので、嵐はおさまったと判断して、家族は出かけた。」そのような話を聞きながら、無念さで胸が詰まるようでした。天気マークだけではわからない予報や情報を、どうすれば伝えられるのか・・・いまも答えを探っています。

道内暴風雪 8人死亡



中標津車内の母子4人 埋もれ 排ガス中毒

車内の母子4人が、雪崩で埋もれた車内で排ガス中毒死した。

娘と車外へ父が凍死 準別

2015年（平成26年）03月03日（日曜日）北海道新聞 財界 金儲測定 杜氏 39-41



オホーツク大混乱



帰宅困難者相次ぐ

停電千戶

避難所へ停電千戸

北海道新聞 2013年3月4日掲載（著作物利用許諾番号 30711）

3. 予報が伝わっても対策ができない

2016年8月29日、台風10号の進路予測や資料を見ながら背筋が凍るようでした。
北海道が壊れる！

スパコンが計算した予想雨量は、十勝地方で最大400ミリ。

雨に脆弱な北海道は 100 ミリを超えると災害が生じやすくなりますが、その 4 倍です。すでに、北の大地は最悪な状態でした。わずか 1 週間に 3 つの台風（8 月 17 日 7 号、21 日 11 号、23 日 9 号）が相次いで上陸し、地盤はすでに緩み、川の水位は上がったままです。

追い打ちをかけるように観測史上最大級の大雨が迫る中、各メディアでも臨時報道が続けられていましたが、地域の災害担当者もあと何ミリ降れば危ないのか、あと何ミリで土砂

災害や河川の氾濫が発生するのか、わからない状態でした。大雨の防災対策マニュアルには、「避難所への移動を促す」、「浸水が始またら外に出ず、垂直避難の呼びかけ」などがありますが、実際は、南富良野町は避難所に土石流が流れ込み被災しましたし、清水町では、家ごと流される被害もありました。観測史上一番の現象は、対策の正解がなくなるのです。予報はできても、予報のその先に、何が起こるかわからない・・・どのように防災に繋げるべきでしょうか。いまも答えを探っています。



2016年8月 南富良野町幾寅地区の避難所（UHB 報道ディレクター撮影）



2016年8月 清水町 (UHB 報道ディレクター撮影)

4. おわりに

今回の受賞はマスコミメディア関係者としては初めてと伺っており、大変光栄に感じながら、前述させて頂いた気象報道の課題を解決すべく期待としても受け止めています。また、北海道は、地域によって天気の特性が異なり、「気候多様性」が存在すると考えています。今後、温暖化の進行により、世界中で適応策が講じられる中、北海道の気候に一層注目が集まる事を確信しています。第一次産業や観光業はもちろん、天気がエネルギーになる再生可能エネルギーでも潜在性が高く、気象予測のより高い技術や活用が求められるでしょう。北海道の気象キャスターとしても尽力していきたいと思っていますので、皆様から今後もご指導やご教示を頂きたく、よろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。